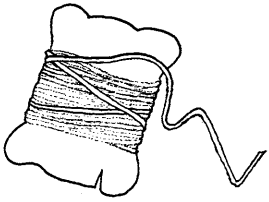
わたしの　とった

谷脇　のぞみ

年少組、五月初旬のある雨の日。アキコが泣きそうな顔をして「先生、わたしの　あの人がとった」と、言いに来た。指さす方を見ると、サキが、ままごと用の木のまな板をかかえている。アキコに「あのまな板、アキコちゃんが使ってたの？」と聞くと、アキコは「うん」と答えた。それを聞いたサキは、不満そうに、「だって、サキちゃんが前に見つけちょったがで」と言う。私が「前っていつ？」と聞くと、「昨日よえ。サキちゃんも使おうと思うちょったがで」と言う。アキコもサキも自分のだと言って譲らず、まな板の引っ張り合いになった。どちらも自分の物にしたくてギュッとつかんでいる。そのうち、二人とも泣き出してしまったが、それでもまな板をしっかり持って離さない。私は近くにプラスチック製のまな板があるのを見つけ、「これにしない？」と、どちらにともなく勧めるが、二人と



も「いや」と言って、なおもまな板を握り締める。そして、引っ張りきったサキが、まな板を使い始めた。

アキコは「わたしもまな板がほしい」と言い続けた。私は「そう。アキコちゃんもほしいよね」と言いながら、そばにある大きな皿を差し出し、「これでも、まな板に使えるよ」などと他の物で代用することを提案してみるが納得しない。

そうしているうちに、すぐそばで、リョウスケとカオルコがままごとの包丁の取り合いを始めた。「僕の」「カオルコの」と包丁をしっかり握り締め、顔は真っ赤になり、涙もあふれそうである。別のコーナーにひと回り小さい包丁があったので、「これを使ったら?」と言いながら私が二人を振り返ると、包丁は放り出されて、今度は、赤い電話を取り合っている。もう一つ同じ電話があるはずなので、探して持って行き、「もう一つ電話があったよ」と言うが、リョウスケもカオルコも「これがいいが」と最初の電話を引っ張り続ける。

その取り合いの声を聞いて、さっき、まな板を取り合っていたサキが、「わたしも電話がいる」と言い出した。そこで、私は二つ目の電話には関心を示さなかったリョウスケとカオルコの二人に、「この電話、サキちゃんに貸してあげていい?」ときくと、必死で引っ張っていた二人の手が止まり、もう一つの電話に目がいった。

電話の方に気がそれたからか、サキはまな板を使わず、粘土を手で丸めてごちそうを作り始めた。アキコは、まだ、まな板がほしいと言っている。私は、二人の様子から、今、本当にまな板を使いたいのは、使っている最中にとられたアキコではないか、サキは自分が前に使っていた物を他の人が使っているのを見てほしくなっただけであり、それほどまな板を必要としているわけではないのではないかと感じた。そこで、サキの気持ちがまな板からそれたとき、私は、アキコに、まな板がサキの後ろに置

きっ放しになっていることを指でさして知らせ、今がチャンスと目で合図した。そのとき、私は、アキコに「サキちゃんは今、まな板を使っていないから、貸してって言ってみようか」と、言うべきであろうかとも考えた。けれども、「かして」と言われたサキが、またほしくなって「いや」と言い、まな板をかかえる姿が目に浮かんだ。そこで、人の気がそれている間に使うというのも、この時期、有効な手段であることを経験してきた私は、サキには気づかれないように黙って取ることをアキコに勧めたのである。

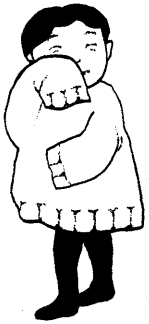
アキコはまな板をそっととり、少し離れたところに持って行き、まな板の上で粘土を切り、ままごとの続きを始めた。

リョウスケとカオルコの方を見ると、それぞれひとりずつ電話をひざに乗せ、受話器を持って、だれかと話をしている。

サキもまな板のことは忘れ、粘土のごちそうを作っていた。

ほんの数分の騒ぎはおさまり、しばらくはそれぞれが、思い思いの遊びを楽しんだ。

私は、入園してまだひと月も経たないこの時期、一人一人の子どもが、安定して自分らしい生活をゆったり送ることができるようにという願いをもっていた。そのため、いろいろな遊びが始めやすいように、また、やりたいと思ったら、だれでもできるようにと、遊具も多めに用意していた。けれども、子ども達はいくつ同じものがあっても、〝これ〟が



ほしいことが多い。あるときは、〝これ〟だけではだめで、〝これ〟も、〝それ〟も、〝あれ〟も、全部ほしいこともある。そして、取り合いになってしまう。

四人は入園してからこの日まで、どんなふうに過ごしてきたのだろう。

カオルコとサキは、いろいろなことがやってみたくて、人がやっているとそれがほしくなり、よく取り合いになっていた。自分の物にならないと、「サキちゃん（自分）に、貸してくれん」とか、「わたしのやに」と言いながら泣くこともよくあった。そして、「わたしのやき！」と強い口調で言われた相手は、なんだかよくわからないけれど、譲ってしまったり、教師に「他にも同じのがあるよ」と言われると、それを使ったりしていた。けれども、だんだん他の子ども達も幼稚園での生活に慣れてきて、「返してや！」と言われても、「わたしだってほしいがやき」と言い返すようになってきた。そして、取り合いが、たびたび起きるようになった。

アキコはままごとが好きで、入園当初から毎日のように粘土でごちそうを作っては、お気に入りの猫のぬいぐるみに食べさせていた。粘土で遊び始めても、少し遊ぶと他の遊びに言ってしまう子が多いが、アキコは一人になっても粘土でごちそうを作っていることが多かった。

リョウスケは、登園してしばらくは母親と離れがたく、毎日三十分～一時間ほどは、母親と一緒に遊び、どちらかというとおとなしい印象の子どもであった。この日、母親が九時には帰る約束をして来

たからと、九時になっても母親と離れたくなくて泣き出したリョウスケを置いて帰った。リョウスケは、そのうち、いつも母親と一緒にままごとをしているところへ行き、ままごとを始めた。いつもは、ままごとコーナーのまわりにあまり人がおらず、自分の使いたい物は大体使えていたのであるが、この日は雨も降っており、遊びたい人が次々やって来て取り合いになった。

取り合っているときの、四人それぞれの気持ちは、どうであっただろう。

まな板を使って粘土でごちそうを作っていたアキコは、今している遊びにはまな板が必要なのに、その道具を取られたので、返してほしいと思っていただろう。

以前にまな板を使って遊んだことのあるサキは、まな板は自分が使えるものだと思っていたのではないだろうか。前に自分が見つけた物や、使ったことのある物は何でも、自分の物だと思い、また、初めて見つけたものであっても、自分がほしいと思った瞬間から、自分が使えるものと思って、他の子には使わせたくなかったのではないかと思われた。

包丁や電話などが次々とほしくなるカオルコは、使いたくて取り合っているというより、人が持っているからほしくなっているように思われた。

母親と一緒にいたかったリョウスケは、母親が帰ってしまった後、母親と、一緒に使っていたままごとと道具がそばにあることで安定していたのではないだろうか。それを他の人が使うことは、安定のもとを取られるようで、不安でたまらなかったのではないかと思われた。

私は、まず、それぞれの子ども達の思いに共感したいと思った。母親と離れ、だれも知っている人のいない幼稚園で、友だちは今のところ一緒にいて楽しいというより、自分の邪魔をする存在であるかもしれない。そうした中で、先生は自分の思いをわ

かってくれると感じるということは、心の安定につながり、気を取り直して、また遊ぼうという気持ちにつながっていくと思う。そこで、大人から見れば自分勝手な考え方であっても、それぞれの、〝ほしい〟〝使いたい〟〝とらないで〟という気持ちを大事にし、言葉や態度でそれを主張できるように見守った。

自分の主張と他人の主張がぶつかり合うことによって、自分のまわりにいる他の人を意識したり、自分の中に葛藤を感じたりする。葛藤を多く経験するうちに、あの人が持っている物がほしいな、取ったら怒るかな、どうすれば貸してくれるだろうなどと、相手の気持ちを考えるようになるのではないかと考えた。

そして、できれば双方が楽しく遊べるように、他の物でも間に合うならと、取り合いになっている物と同じような物をもう一つ探しては、それも使えることを知らせた。それでも他の物では気に入らず、引っ張り合いが続いたので、サキの勢いに押されているアキコには、「アキコちゃんもほしいよね」と言い、サキに「アキコちゃんも、まな板ほしいんだって」とアキコの気持ちを代弁した。さらに、サキがまな板を使わなくなったとき、そのことをアキコに知らせ、今のうちに使うことを示してみたのである。

そのような取り合いや自己主張を繰り返し、子ども達も、ひと月あまりたつと、「貸して」「ちょっとだけよ。後で返してよ」などのやり取りが、少しずつできるようになってきた。

（高知大学教育学部附属幼稚園）